



愛隣幼稚園.....

園だより

.....16. 2月号

支えられて楽しむ子育て

1月の保護者会はタイガーマスク基金理事の高祖さんをお招きして、「地域の仲間として私たちにできること」と題しお話を伺いました。双葉学園のある天台からも初めて自治会の皆様をお迎えして、短い時間でしたがおしゃべりタイムで交流の時をもつこともできました。“顔が見える”というところから大人たちが繋がっていく、そんなきっかけになったら嬉しいと感じる時間でした。

さて高祖さんのお話は、子ども虐待から私たち自身を遠ざけるために、また子育ての悩みやストレスを抱えている仲間を支えるために私たちができることについても時間を割いてくださいました。子育て真最中の私たちは子どもたちからたくさんの喜びをもらっています。でも、同じくらいたくさんの不安やストレスを抱えながら子どもたちに向き合っている、そんなふうに感じている方も少なくないはず。虐待”を自分から遠い言葉と思えない、そんなことが頭をよぎった方もいるかもしれません。実際、私も1人目の子育ては不安だけで、それはそれは神経質になっていました。そんな未熟者に2人目の誕生。年子を抱えた1年はただ必死。振り返れば育児ノイローゼだったのではと思われる言動も。そのころ聞いた虐待のニュースを他人事とは思えなかったのを覚えています。そんな危うい子育てでも何とかやってこれたのは、支えてくれるママたちの存在があったからでした。同じマンションに、公園に、子どもたちがお世話になった幼児サークルに、心を割って話が出来る仲間が居てくれたことで私は危ない子育てを乗り越えてくることができましたように思います。子どもたちが入園した愛隣では更にポジティブな子育てをしているお母さんたちにたくさん出会いました。「3人も4人も5人も子どもがいるのに、なんでそんなに笑顔で楽しそうなんだ！」それは大きな驚きで、自分には難しいことに思われました。ところが、自分が3人目を産む時にはこのポジティブ母さんたちから安心をもらい、「もしかして、子育てはもっと面白いのかもしれない。3人目は楽しめるかもしれない。」と思えるようになっていました。そしてその通り、3人目にして初めて、生まれた時から“楽しい子育て”をさせてもらうことができました。

昔、子育ては大家族の中で行われていました。次第に核家族化が進み子育ては2人の親が担うものになりましたが、実際には母親がそのほとんどを担うこととなりました。私が親になってから25年、今はイクメンという言葉もあり、父親も積極的に育児を担っていこうという時代になりました。それでもまだ、お父さんが育児をする環境には限界があり、子育てがお母さんの孤軍奮闘に依存している状態にそれほど変わりはないように思われますが、実感はいかがでしょうか？密室の中の孤独な子育てにならないために、やはりお母さんたちが誰かと繋がっていくことは必要です。先日の講演会で高祖さんが子ども虐待防止のポイントとして以下のことを挙げてくださいました。＜1. 周囲のあたたかい目 2. 困った人に照準を合わせたサポート 3. 子育ての情報提供を広く、ニュートラルに 4. パパが子育てすること 5. ポジティブ子育てを知ること＞ これらは（4を除いて）お母さんたちが誰かと繋がることによって可能になります。それはさらに“楽しい子育て”にも繋がっていきます。年末に「ははどり」が発刊となりました。そこには愛隣の中で繋がっていった親たちの足跡が今年も記されていました。苦勞の多い子育ての本音を語り、嬉しいことを数え、子育てを通して自分自身のことも書き残すことができる、その背景に、この子育てを支えてくれたたくさんの人たちの顔が見えてきました。愛隣は子育てを担うお母さん・お父さんに『子育ては楽しい』と実感してほしいと願っています。同じように私たち保育者も『保育は楽しい』と思うことが大切です。“君たちといえることは楽しい”と思う大人たちに囲まれて、子どもたちは安心して楽しんで歩みを進めていくことができる、そう考えています。